

2008年6月

第2回 日本語能力試験改定 中間報告

日本語能力試験改善に関する検討会
国際交流基金
日本国際教育支援協会

1. 改定理由

日本語能力試験は1984年に受験者約7,000人で第1回試験が開始され、2007年12月の試験では約524,000人が受験する大規模試験となりました。この間にテストに関する数々の要望などが出てきました。また、1996年と2000年には改定のための中間報告書¹でそれぞれ具体的な課題が指摘され、2001年には文化庁の調査研究協力者会議の提言が出されました。そこでこれらを踏まえ、2004年には改定作業に着手することになりました。

2. 今後のスケジュール(案)について - 年複数回実施と改定 -

2007年に中間報告を行ったとき、改定新試験の開始は、2009年12月からとお伝えしていましたが、準備の都合により、改定新試験の開始時期を2010年に延期させていただくことにいたしました。

さて、世界の日本語学習者の数が300万人に達する現在、日本語能力試験の年複数回実施への要望が国内外で高まってきています。そのため、改定新試験を開始する前の2009年から、日本語能力試験を年2回行うこととなりました。従来の12月実施に加えて、2009年の7月に現行試験の1・2級のみ試験を実施します。実施地は、要望の強かった日本国内および中国などの海外の一部地域としたいと考えています。

3. 改定ポイント

改定のポイントは、以下の4点あります。

(1) 新しい試験がめざすもの

課題遂行能力とそのためのコミュニケーション能力を測定する試験をめざしています。また、これらの能力を支える基礎となる言語知識についても測定していきます。学習者の実際の言語行動を反映した試験をめざします。

¹ 『日本語能力試験企画小委員会調査部会 中間報告書』(1996)日本語能力試験企画小委員会調査部会編 国際交流基金/日本国際教育協会、『日本語能力試験企画小委員会 第2次中間報告書』(2000)日本語能力試験企画小委員会編 国際交流基金/日本国際教育協会

(2) レベル設定

これまで、3級に合格しても2級合格へなかなか手が届かないこと、1級より上のレベルの能力測定の希望があることなどについて、試験改善の要望が寄せられていました。また、日本語教育の進展や社会状況の変化により、現在では試験開始当初とは異なった多様な受験者層が見受けられるようになってきています。このような受験者の日本語能力の多様性に対応できるよう、現行試験の4レベルから5レベルに、レベル調整を行うことになりました。

従来の試験は、上の級から1級 - 2級 - 3級 - 4級となっていましたが、新試験では、N1 - N2 - N3 - N4 - N5 となります。「N」は「N I H O N G O (日本語)」と「N E W (新)」等から、はじめの「N」を取りました。

N1：現行試験の1級と合格レベルはほぼ同じですが、従来より若干高めの範囲まで能力測定ができるように改定します

N2：現行試験の2級とほぼ同レベル

N3：現行試験の2級と3級の間のレベル

N4：現行試験の3級とほぼ同レベル

N5：現行試験の4級とほぼ同レベル

なお、N1～N5はすべて「よむ試験(文字・語彙、文法、読解)」および「きく試験」からなります。口頭や作文の試験については、今回の改定では残念ながら実施できません。

表1 新試験のレベルイメージ

レベル	典型的な言語行動例
N1	<p>【読む】母語話者向けの、新聞の論説など論理的に構成された文章を読んで、話の論理的な筋を理解したり、抽象性の高い文章などを読んで抽象的な概念構成を理解したりすることができる。またより幅広い話題の、内容に深みのある読み物を読んで、話の流れに加え詳細な表現意図も合わせて理解することができる。</p> <p>【聞く】さまざまな場面において自然なスピードの、まとまりのある会話やニュース、講義を聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係や内容の論理構成などを詳細に理解したり、要旨を把握したりすることができる。</p>

N 2	<p>【読む】母語話者向けの、易しく書かれた概説書などを読んで理解することができる。辞書を使えば、やや専門的なものが読める。一般的な話題に関する平易な読み物を読んで、話の流れだけでなく表現意図も合わせて理解することができる。</p> <p>【聞く】日常的な場面に加えてさまざまな場面で、自然に近いスピードの、まとまりのある会話やニュースを聞いて、話の流れや内容、登場人物の関係を理解したり、要旨を把握したりすることができる。</p>
N 3	<p>【読む】母語話者向けの文章を非母語話者に向けて語彙や漢字数を制限して書き直した文章を、読んで理解することができる。また母語話者向け新聞の見出しから一定の情報を得ることができる。日常場面で目に触れる文章は、辞書を使って時間をかければ必要な情報を得ることができる。</p> <p>【聞く】日常的な場面に加え、日常的にはあまり頻繁に遭遇しない場面であっても、やや自然に近いスピードの、まとまりのある会話を聞いて、話の具体的な流れを登場人物の関係などと合わせて大まかに理解できる。</p>
N 4	<p>【読む】非母語話者に向けた、身近な内容のなじみのある文章を読んで理解することができる。</p> <p>【聞く】日常的な場面での会話を聞いて、ゆっくり話してもらったり、聞き返すことができれば話の大まかな流れが理解できる。</p>
N 5	<p>【読む】非母語話者に向けた、ひらがなやごくやさしい漢字で書かれた語句や文を読んで理解することができる。</p> <p>【聞く】日常的な場面の中でも特に典型的な教室や身の回りの場面で、主に単文や語句からなる定型の会話を聞いて、非母語話者向けを意識してゆっくり話してもらったり、聞き返すことができれば、用を足すにたる情報を聞き取ることができる。</p>

(3)「 ができる (Can-do Statements)」による参考情報の提示

新しい試験では「このレベルに合格すれば ができる」という、参考情報を公表します。これは受験者自身による、 ができるかどうかの自己申告を集計したものです。これによってこれまでの合否と得点に加え、レベルイメージ例が具体的に与えられるので、受験者が現在の自分の能力を把握したり、今後の学習目標を立てたりするのに役立つ

ちます。就職や進学などにおいても、その人が何をどの程度できるのか、具体的なイメージ例を示すことができるようになります。

(4) 得点等化

問題作成時にどんなに配慮しても、毎年の試験の難易度を完全に等しくすることは困難です。現在、1年に2回試験を行う複数回実施の希望も多く、これが実現した場合には特に受験時期が違う試験の結果の比較を可能にしておく必要があります。こうすることで、受験者はどの時期の(問題が異なる)試験を受けても不利益を被ることがなくなります。これはテストの統計分析の手法では得点等化と言い、同じ能力であればいつの試験を受けてもほぼ同じ得点になるということです。得点等化は世界の大規模言語テストですでに実施されています。新しい日本語能力試験でも、この方式を採用しようとしています。

4. 試験問題の非公開

これまでは日本語能力試験の問題は、実施した翌年の春には問題集として出版されてきました。しかし新試験からは、レベルイメージ(表1参照)やサンプル問題などは公表しますが、問題は全て非公開となります。問題を非公開にするのは、試験の質的水準を保つためです。TOEFLなどの諸外国の試験は試験問題を非公開とする方式を採用しています。世界水準の品質が保証された試験とするためには、この措置が必要となります。

5. ご意見等のあて先

新しい試験が2010年7月に始まるまで、引き続きこの改定への作業が続きます。改定へのご意見やアドバイスなどおありでしたら、下記にご連絡くださるようお願いいたします。

なお、ここに記述いたしました内容は、あくまで現時点でのご報告に過ぎず、検討及び調整の結果変更されることもありますので、ご了承くださいませようお願いいたします。

日本語能力試験 改善に関する検討会 事務局

メールアドレス : jlpt@jpf.go.jp

ウェブサイト : <http://www.jlpt.jp/>

以上